【フロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	３８
都 道 府 県 名	愛媛県

（①□　②☑　③□）

Ⅰ．学校名及び規模

今治市立立花中学校

	１　年	２　年	３　年	特殊学級	計	教員数
学　級　数	５	５	５	１	１６	３５名
生　徒　数	１８３	１９３	１７８	１	５５５	

Ⅱ．実践研究の概要

・　主題

　習熟度別少人数指導の効果的な指導方法

・　主題設定の趣旨

　習熟度別少人数指導において、生徒の実態をふまえて、編成方法・授業形態・授業進度・授業内容・評価等の指導方法を工夫・改善することにより、個々のつまずきを早い段階で発見し、個に応じたきめ細かい学習指導を展開し、一人一人の学力向上を図ることができると考えた。

Ⅲ．実践研究の内容について

（ⅰ）研究体制の工夫

　本校では「学力向上フロンティア」を、教師の「指導力向上フロンティア」ととらえ、全教科で「学力向上」をめざした取り組みを行っている。校内で共通理解をし、同一歩調で取り組む内容と平行して、「指導力向上」の観点からボトムアップの発想で、「学力向上フロンティア事業」の内容に関する研究を教師一人一人が計画して行っている。この一研究は、教師一人一人の主体的なアイデアを生かした実践を普段の授業で行い、授業研究や実践例、成果の発表を通して、明らかになったものを共有化し、互いに指導力の向上をめざして、授業改善を進めていこうと考えている。「習熟度別少人数指導」に関する研究は、その一研究の一つである。

（ⅱ）　実践研究の内容

１　指導形態と編成の工夫

(1) 指導形態とコース名

　基本的に、全授業を１クラスを２つのコースに分け、２人の教師がそれぞれ別教室で授業を行う形態としている。確かな学力を身に付けさせることと、生徒が差別感や劣等感をいだかないようにという観点から、「発展」という名称を使わ

ず、「基礎コース」と「標準コース」というコース名にした。

(2) 編成方法

単元導入の前に、その単元を学習するために必要な知識についてのチェックテストを行う（例えば、「連立方程式」の前に、１年時の単元の「方程式」）。問題数は10問程度で、10分程度でできるものとし、平均が約70～80点になるような基本的な問題を出題している。

指導者が採点をしてコース選択の目安を説明する。本来の習熟度別は、教師がコース分けを行うが、生徒が差別感や劣等感をいだかず、選んだコースが自分のためになっていると感じられるように、チェックテストの点数をもとに、適していると思うコースを自分で選択させた。コースの選択を迷っていたら、どちらのコースが本人に合っているか相談した。

生徒の希望数が大きく偏っていたり、明らかにコース選択をまちがっていると考えられる場合は、強制はしないが助言をした。理想的な人数配分は、「基礎コース」が30%、「標準コース」が70%にしたいと考えていた。

単元ごとにコース編成を行い、単元途中のコース替え、変更は、評価・教材等の問題があるので、原則として行わななかった。

(3) 指導者

当初、二人の教師がすべての生徒と関わりを持つことで、より客観的で信頼性の高い評価ができると考え、学期ごとか単元ごとに指導者が入れ替わることを予定していた。しかし、生徒との人間関係づくりを考え、基礎コースを経験豊かな教師が担当し、１年間同じ教師が同じコースを指導した。

2　学習内容・教材の工夫

(1) 学習進度と学習内容

同じ時間に単元別テスト等を行う必要があるため、人数学習の留意点を記入した年間指導計画を作成し、原則として学習進度はそろえた。

計算領域において、「基礎コース」では分数、小数の問題の割合は少なくするなど、学習内容の深さはコースによって変えた。また、自信をもたせたり、意欲化を図るため、計算やグラフがきちんとできているかどうか確認するのに、生徒の中から「ミニティーチャー」を設定したり、生徒同士で学び合いをさせたりするなど、少人数だからできる授業を心がけた。

(2) 教材の工夫（例）

１つの証明問題に対し、「記述形式」「穴埋め形式」「ヒント付き穴埋め形式」という３段階の習熟度に応じた学習プリントを用意し、自分の習熟度に応じた学習プリントを選んで学習させた。習熟度に応じられる教材を準備することで、苦手な生徒にも証明問題に親しみと自信をもって取り組ませることができると考えた。また、証明の形式をまとめたものを常時掲示しておき、証明の流れを身につけさせる手助けとした。

3　評価

定期テスト・単元別テスト・提出物・自己評価・発表等の授業中の活動に対する教師の評価を総合して評価した。定期テストの作成は指導者が交代で行い、同じ問

題で実施した。問題は、教科書、使用している問題集を中心に出題した。

4　保護者への説明

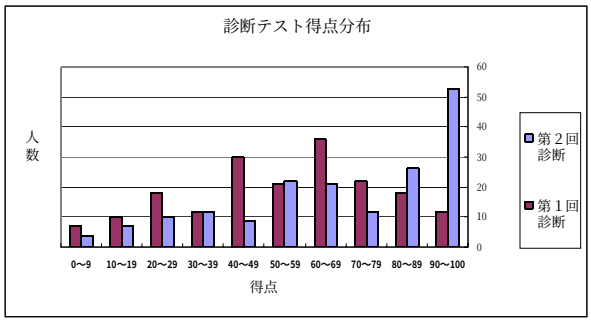
保護者向けに、少人数指導の目的、方法等を説明した文書を配布し、理解を求めた。

(iii)　成果と課題

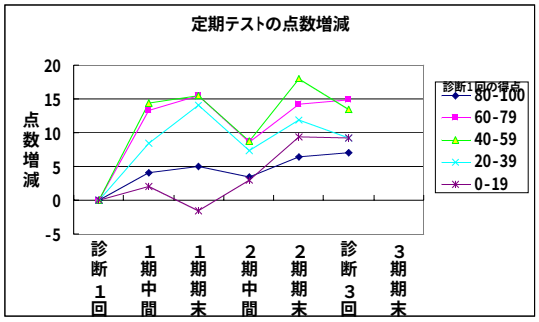
1　成果

２年生では、愛教研の作成した学力診断テストを１年間に２回実施している。２年生に進級して間もない４月に行った第１回と、３学期の１月に行った第２回の結果を比較した。出題範囲は、第１回が１年生の内容、第２回が２年生の２学期末までの内容である。次のグラフ１は、得点分布の比較をグラフ化した。全体として、得点の高い方向に分布がシフトしている。グラフ２は、生徒個人の得点の変化を平均的に見るためのグラフである。第１回診断テストの得点から、生徒を20点刻みのグループに分けた。そして、生徒一人一人について、それ以後の定期テストと、第２回診断テストの得点の増減をグループごとに平均してその移り変わりをグラフ化したものである。このグラフによると、診断１回テストの得点が低い生徒から高い生徒まで、すべて得点が向上しており、生徒個々の学力が向上していると考えられる。

テストには難易度のちがいがあり、客観的に学力の向上を明言することはできないが、少なくとも得点の増加から、生徒の学習に対する自信と、意欲の向上が図れたと考えられる。



グラフ１



グラフ２

2　今後の課題

客観性・信頼性のある評価を工夫すること、習熟度別少人数指導のメリットをもっと生かせる生かした指導方法の工夫をしていきたい。また、少人数指導では、意見の発表がだんだんと減ってくる傾向がある。少人数指導において活発な意見発表の方法等、学習に自分から積極的に取り組んでいこうとする「自ら学ぶ」態度の育成を図ることが、課題として感じていることである。

(iv)　成果の普及方策

地区協議会で公表するとともに､授業で使った教材などをホームページで公開し、ダウンロードすることで活用してもらえるようにしていきたい。